



日本の季節感を楽しむ

副校長 半野田 聡

明日から7月が始まります。今年度も、保護者の有志の方が、1階廊下に七夕の飾り付けをしてくださり、七夕の雰囲気を楽しませてくれています。児童のみなさんが書いた短冊も彩りを添えています。

7月の風物詩でもある七夕。夜空を見上げると織姫星と彦星として知られるベガとアルタイルが輝き、その間に横たわる壮大な天の川。そんなイメージが自分の中には広がっています。しかし、これまでの人生を振り返ってみても、7月に七夕のイメージどおりの夜空に出会ったことはないように感じます。昔、「天の川は8月の方がよく見える。」と教えてもらったことがあります。不思議に思い調べてみると、もともと、七夕は「旧暦」の7月7日、現在の8月にあたるということが分かりました。今の暦（カレンダー）とは、1か月程度ズレていることになります。確かに、8月なら、晴れ渡った夜空も多く、七夕のイメージや季節感と重なります。でも、なぜ今の暦と旧暦ではそんなにズレが生じるのでしょうか？

実は、現代の暦と旧暦では、作り方が違っています。私たちが毎日使っている暦は、365日で1年を構成しています。これは、地球が太陽を一周する時間を基準にして作られており「太陽暦」と呼ばれています。一方、旧暦（太陰太陽暦）は、月の満ち欠けを基準として、太陽の動きも加えながら作られました。月が新月（見えない日）のときを1日として次の新月までを1か月と捉えます。数えてみると約29.5日の間隔になるそうです。この数え方だと、12か月は約354日となり、私たちが慣れ親しんだ365日と11日違いが生じます。このまま進めていくと、毎年少しずつ季節とズレが生じていきます。それを修正するために、旧暦では2～3年ごとに「うるう（閏）月」を入れて、1年を13か月にして調整しました。現代の閏年と考え方は同じですが、1年が約29日増えるということにおもしろさを感じます。七夕以外にも、立春（2月）や立夏（5月）なども、現代の暦から1か月ちょっと進めてみると季節感としくりくる気がします。日本に住む人々は、昔から季節感を重要視し、旧暦を使用してきたことがうかがい知れます。二十四節季や七十二候などでより細かな季節の移り変わりを表現してきたこともその表れでしょう。

現代の暦に慣れてしまった私たちにとっては、旧暦は少し違和感を覚えることがあるかもしれませんが、西洋化したシステムの中ではうまくマッチしない点も多いことでしょう。しかし、日本の特長である季節感を大切にするという感覚が旧暦に多く詰められているのも事実です。儚く繊細に移ろい行く日本の季節は、日本に住む人々にとってかけがえのない宝物だと私は考えます。最近では、猛暑の夏が当たり前になり、季節を楽しむどころではない感じがするのも否めませんが、でも、意識して探してみればまだまだ日本らしい季節感を味わえる場所や場面、瞬間があると思います。7月19日からは長期の休みに入ります。猛暑に辟易するだけでなく、子どもたちにはぜひ日本の夏の季節感や風情を楽しんでもらいたいと思います。